様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ１８１９８

研究課題名（和文）近代イタリアの都市改造期におけるヴィラ群の変容に関する研究

研究課題名（英文）Research on the transformation of villa areas during the urban development period in the modern Italy

研究代表者
會田　涼子（KAITA, Ryoko）

近畿大学・建築学部・講師

研究者番号：４０７３４０６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代イタリアの都市拡張期におけるフィレンツェとローマにおいて、遷都の時期を境に都市改造及び都市拡張計画に伴う住居地区に建設されたヴィラ建築群が従来のパラッツォやヴィラといった住居形態からどのように変化していったのかを、現地調査と史料・文献の収集、精査、分析を行うことでその個々の住居形式と様式、住居群としての地区形成、既存の土地建物の転換と変容に着目して明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、近代化における都市拡張においてヴィラとパラッツォいう既存の建築形態と既存の土地利用状況の変化に着目し、歴史的な都市・建築の近代化という視点をもっていることと、イギリスやフランスなどの近代化の先進技術を導入した国として日本との比較対象として有用となり得る点で、学術的・社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：In Florence and Rome during the urban expansion period of modern Italy, villa buildings were constructed in the residential area due to the urban remodeling and urban expansion plan at the time of the transition of the capital. This was done based on such conventional residential forms as Palazzo and Villas. For this study, a field survey was conducted and the historical materials and documents related to this construction were collected and analyzed. As a result, it became possible to identify the type and style of each individual residence, the district formation as a group of residences, and the conversion and transformation of existing land and buildings.

研究分野：都市史

キーワード：イタリア　近代　都市改造　都市拡張　住居地区　ヴィラ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）日本国内では戦後のイタリア都市再生手法が注目されていたが、その前提となる近代イタリアにおける都市の研究はほとんど行われておらず、既存の都市構造がどのように近代化したか、またはしなかったのかを明らかにする必要があった。

（２）イタリア国内では都市ごとには多くの研究の蓄積があったが、研究対象の細分化が進み、都市間の比較研究はあまり行われない傾向があり、イタリア文化の多様性や複雑性解明のため、都市間の比較をする必要があった。

２．研究の目的

本研究は、近代イタリアの都市周辺部の住居地区を対象として、都市改造手法と建築類型の変容と相互関係を明らかにしようとするものである。具体的には、イタリア国家統一期の首都移転を契機として形成された住居地区にあるヴィラ建築群を、景観形成手法に焦点をあてて分析することで、従来の伝統的ヴィラ建築の配置・形態の計画がいかに都市構造のあり方に影響され変容していったかを明らかにする。これは、歴史的都市をその歴史的都市としての価値を保持しつつ近代的首都として成立させるために、いかなる手段が講じられたかの実態的様相の一端を解明する試みでもある

３．研究の方法

（１）史料の収集：フィレンツェの国立文書館、市立文書館、ガビネット・ヴィュッスー文書館、ルネサンス研究所、フィレンツェ大学地図図書館にて都市図、カタスト（土地台帳、地籍地図）、都市計画報告書、市議会議事録、水理計画図を複写・データで収集する。

（２）デジタルデータの収集：イタリア軍事地理院、トスカーナ州立地図図書館からトスカーナ州発行の地形・水路・建築物情報などが収録されたデジタルデータを入手し、そこからコンピュータ処理によって断面形等を割り出す。

（３）文献収集：関連文献をフィレンツェ国立図書館、大学図書館等にて複写で収集し、購入可能な書籍は書店・古書店で購入する。

（４）現地調査：実測・写真撮影・動画撮影を行う。

（５）修士課程・博士課程在籍中から指導を受けているフィレンツェ大学建築学部教授ガブリエーレ・コルサーニ教授（現在名誉教授）には指導を仰ぎ研究を進める。

４．研究成果

１）平成 27 年 9 月 1 日から 9 月 6 日まで、フィレンツェ国立中央図書館（BNCF）において、フィレンツェの 18 世紀後半から 19 世紀半ばにおける都市改造と土木事業に関するイタリア語文献リストを作成し、複写にて収集した。また、希少書籍と古地図に関してはフィレンツェ内の古書店をまわり、それぞれ購入した。実地調査では、研究対象地区の建築物の写真撮影を徒歩で行い、連続的な風景を検証するため、車中から動画撮影を行った。近年、増加しているインターネットで閲覧できる関連史料の現状把握と、リスト化・データ化を継続的に行った。

以上の新たな文献収集と実地調査によって、フィレンツェの近代化都市改造と 18 世紀後半の土木技術の発展とを、丘陵地における道路・広場建設の際の眺望確保という観点から関連付けて検証する指標をいくつか設定することができた。これにより、これまでの研究では精査していなかった 18 世紀の土木事業に関する史料を、新たに収集する必要がでてきた。

また、実地調査を行うことによって、建築物の立面、配置計画などにおいて分析できる範囲がより明確化し、地図上では把握できない眺望の在り方を確認することができた。これにより、研究対象地の初期段階の計画にかかわる史料の精査を先行して行う必要ができた。このため、当初予定していた平成 28 年３月の実地調査は次年度以降に行うこととし、本年度は史料と文献の収集、既収の史料の整理と分析を継続的に行った。

２）平成 28 年度は、前年度に収集したフィレンツェの 19 世紀半ばにおける都市改造と土木事業に関する伊語文献、史料、実施調査による結果から論文化を行った。

対象年代を 18 世紀まで拡張したことにより、19 世紀の都市改造における既存の都市構造への介入手法、洪水対策の手法、理論上の新古典主義的傾向を確認することができた。

コッリ大通り周辺住居地区については、実際に建設された独立形式のヴィラ群の大通りに対する配置や、大通りから見える眺望の構成原理を明らかにするため、各ヴィラの土地区画内における配置、正面ファサードの形式・様式などの意匠性、大通りからのヴィラの見え方について、配置図、立面図等の作図行い、分析・考察を行った。ここからコッリ大通り沿いに面したファサードが最も優位性をもった意匠となっている一方で、2 つの大通りに面したヴィラに関しては背面も正面ファサードに準ずる意匠がなされていることが明らかとなった。また、個々のヴィラと

庭園の大通りに対する配置関係から、想定されていた眺望はヴィラのファサードが大通りからの一定の距離を保ったものではなく、ヴィラが大通りから見え隠れするような近景、遠景を交互に形成するような配置となっていることが明らかとなった。それによって庭園の様式はピクチャレスクなものと幾何学的なものが混在する結果となっていた。

個々の建築の設計に関しては、個別のヴィラの設計手法に関して景観の観点から詳細な分析を行い、都市改造において参照したとされるイギリスの広場と住居建築に関しても比較検証をおこない、ファサードにおいてバースのロイヤルクレセントと酷似したパラッツォが建設されたが、立面プロポーションと平面構成が著しく異なり、既存の都市構造との関連が要因であることが考えられた。

３）平成 29 年度は平成 30 年３月２日から８日にかけて、フィレンツェに滞在し、研究対象地区の現地調査（実測、写真撮影など）を行い、調査結果の図面化、図式化を行い、分析を進めた。また、希少書籍と古地図に関してはフィレンツェ内の地図発行機関や古書店をまわり、それぞれ購入し、文献や地図のリスト化・データベース化を行った。また、インターネットで閲覧できる歴史史料の継続的な探索とデータベース化を行った。

フィレンツェの丘陵地区のヴィラ群に関しては、前年度までの建物配置やファサードの検証に加え、史料探索によって平面図が入手でき、外観と平面の関係が部分的ではあるが明らかとなった。また、研究対象のヴィラ住居地区のうち、ヴィラ・フランケッティ・ナルディ、クラシック・ホテルの 2 件の実測調査を行い、平・立面形態が明らかになった。

旧市壁跡環状道路沿いの住戸については、現地調査の結果、パラッツォ形式とヴィラ形式、ヴィラ＝パラッツォ形式の３種類が混在し、旧市壁の内外両側にヴィラ形式の住戸が建てられていたことが実地調査からわかった。パラッツォ形式には、同街区内の隣地が未建設地の場合、後に共有壁を介してパラッツォを建設することを前提としていると思われるものと、そうでないものに分類されることがわかった。ヴィラ形式の住戸は、都市改造時に建設された公園に面したところにみられるほか、都市改造以前に菜園もしくは農地だった箇所に存在していた。また、住戸が街区の角にあるもので、一面は全面に庭園のあるヴィラ形式をとっていながら、他面では隣り合う住戸と共有壁を介した連続して建てられるパラッツォ形式をとっている、ヴィラ＝パラッツォ形式がいくつかみられることがわかった。

４）平成 30 年度は短期間ではあるがローマに滞在し、ローマ近郊のうち特にノメンターナ地区とジャニコレーゼ地区においての 19 世紀にかけて建設されたヴィラと周辺地区の現地調査を行った。この調査によって、ローマ郊外の住居開発地区では、15 世紀から 18 世紀までに建設されていたヴィラおよび附属の庭園の土地を分割して行われた箇所が実地で確認でき、地形によるヴィラ構成と各ヴィラの規模階層がフィレンツェの場合と異なる点が確認できた。ローマにおいては既存のヴィラと隣接するものも多いことから、イタリア諸都市の 19 世紀の郊外地区形成において既存の都市と近郊地域の状況との関連が重要な点であることがわかってきた。その一方で、都市部に近い箇所においては市壁解体の前後にかけて市壁内側にもヴィラが建設されるというフィレンツェの場合と共通する点が見いだせた。

平成 31 年 3 月 2 日～9 日には再度フィレンツェに滞在し、現地調査と史料収集を行った。フィレンツェ国立文書館においては、従来の複写制度が変更されていたため、短期間でコッリ大通り周辺地区と旧市壁沿いの地区全域に渡って課税用不動産登記台帳と地図（カタスト）を予定よりも多く収集することができ、今後の研究に向けた成果があった。フィレンツェにおける研究対象であるベッカリア広場に接続したパラッツォと、コッリ大通り周辺住居地区内にあるヴィラ・ピニャッティ・モラーノの実測と図面収集、写真撮影を行った。

５）令和元年度はローマの都市改造・都市拡張の対象地における文献収集を行った。分析に必要となる都市図・課税用不動産登記台帳などがデジタルアーカイヴ化されていることがわかり、購入及びデータベース化を行った。また、ローマ近郊のヴィラの建設年代を精査し、年代別の都市図にプロットし、近世までのヴィラの敷地が近代において利用された箇所を明確化し、さらに 19 世紀に入って建設されたヴィラの敷地が 1871 年のローマ遷都後に再びより小さな土地区分に分筆されていく状況が作図により読み取れた。これによって 19 世紀前半に多く建設されたヴィラの敷地の一部が新たな住居地区建設に利用されたことやヴィラそのものが消滅していたことがわかり、フィレンツェの場合と異なる現象がみられることがわかった。また、ヴィラ各戸の平面図が存在している規模の大きなヴィラについては大部分を収集できた。

また、9 月にはイタリア都市史学会（AISU: Associazione Italiana di Storia urbana　於ボローニャ大学）にて、日本の都市計画に関する専門誌における西洋の文献や技術の参照というテーマで学会発表を行い（共同発表）、本研究の近代イタリアの都市改造・都市計画に関するテーマの、欧米諸都市や日本の都市との相対化の手法としての都市計画技術の情報流通というテー

マで議論を行った。
　また、今回の研究対象範囲ではないが、イタリアの主要都市でありエミリア・ロマーニャ州の州都ボローニャを視察することができ、近代以降の都市拡大部のフィレンツェ・ローマとの共通性も散見され、今後、イタリアの中規模都市にも着目する有用性があることがわかった。

６）今後の展望としては、ローマ近郊にはまだ多くの未調査のヴィラがあり、これまでと同様の視座で調査・分析を続けていく所存である。特に、ルネサンス時代からバロック期にかけて建設・整備されたヴィラと農地の変容と、一時期のみに建設された規模のヴィラとその庭園の敷地の変化は、ローマ特有の変化が見て取れると考えている。これらのヴィラは現存するものと消滅したもの、部分的に現存するものがあるが、歴史的遺構が多く残るイタリア都市において消失した建築物や土地にも着目し、その過程や要因を考察したいと考えている。
　また、フィレンツェ遷都以前に首都だったトリノ、その他の大中規模都市の変化にも視野を広げていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 會田涼子	４．巻 727
２．論文標題 ジュゼッペ・ポッジ作成の土地利用規定書にみる建築条件と眺望 ： フィレンツェのコッリ大通り建設と周辺の住居地区の形成に関する研究(その1)	５．発行年 2016年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 2061-2070
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.3130/aija.81.2061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 會田涼子	４．巻 85
２．論文標題 土地利用規定地区におけるヴィラの敷地区分と建築規模： フィレンツェのコッリ大通り建設と周辺の住居地区の形成に関する研究(その2)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 463-472
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.3130/aija.85.463	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 會田涼子
２．発表標題 公共浴場建設案と首都フィレンツェ
３．学会等名 日本建築学会歴史・意匠委員会小都市委員会
４．発表年 2018年

１．発表者名 會田涼子
２．発表標題 19世紀フィレンツェの首都化における意匠性の表出―建築家ジュゼッペ・ポッジによる都市改造計画をとおして―
３．学会等名 日本建築学会近畿支部建築論部会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Ryoko KAITA, Masaharu NOMURA
２．発表標題 Journal of urban planning in Japan: the acceptance of western theory and technique (1918-1945)
３．学会等名 9th AISU (Associazione Italiana di Storia Urbana) Congress Bologna（イタリア都市史学会大会 於ボローニャ）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 「都市の危機と再生」研究会	４．発行年 2019年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 406
３．書名 危機の都市史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考